

序
章

ハレー
彗星^{すいせい}
大接近

一葉の世界を涉猟、女性像描き切る

明治四十三（一九一〇）年五月。ハレー彗星が地球に大接近していた。噴火湾に面した小さな村からは、駒ヶ岳目がけて真つ逆さまに落ちてくるかのように見えた。

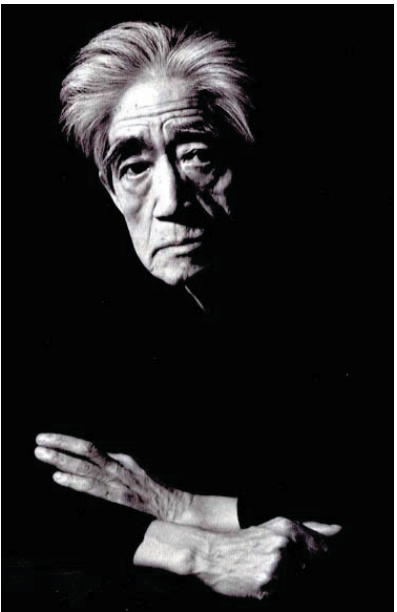
四歳の幼な子の目には、異様な光とともに、母の不安な表情が焼き付けられた。実際、母子にとつて、赤いほうき星はやがて来る不幸の前触れにほかならなかった。

後に日本文学大賞を受けた和田芳恵の「暗い流れ」（一九七八年、新潮社）は、重く、暗い記憶の底から人間の本质としての性を見据えた自伝的小説。タイトルは、アイヌ語で「黒い川」を意味する国縫川に由来し、ハレー彗星との出会いから物語が始まる。

■苦学生支えた級友と恩師／国縫の生家破産、試練の16歳

和田は、長万部町国縫の荒物雑貨店の四男に生まれた。弟とともに新聞配達をして家計を支えたが、函館商船学校に入学した年に生家が破産。一家は村を捨て、士別そして札幌へと移り住んだ。間もなく、父が脳血栓で倒れ、闇は深まるばかりのように感じられた。

大正十一（一九二二）年、商船学校を中退し、北海中学に編入学したものの、幼い弟や妹を養うため



(撮影：中島八重子氏)

の内職に追われた。やむなく、郷里の国縫小学校で代用教員を務め、月三十三円の俸給のうち三十円を家族に仕送りした。もう、学校どころではなかった。

十六歳の少年には過酷な試練だったが、やがて和田は、自分が決して孤立無援でないことを知った。

代用教員勤めは約八か月に及んだが、北海中学の担任や級友が通信授業を買って出た。何より、

学校側が学年末試験に受ければ四年に進級することを認めてくれた。それだけではなく、教頭が育英資金を出してくれる資産家を捜し出してくれたのだ。

当時の思いを和田は、「暗い流れ」の中でこう書き残している。

「私は思わぬことがはじまっているので、どうしたらいいかわからない戸惑を感じた。あまりにも、北海中学が、貧しい生徒に親切すぎると思われた」

実は、彼にとつて意外な展開と見えたその背景には、北海中学の教育思想があった。小説にも実名で登場する校長の戸津高知は、障害者や教育を受ける機会に恵まれない青年、官立中学からの「落伍者」らに、積極的に門戸を開いた。

このことを知って、和田は「戸津校長や多くの人たちの好意に答えるために、学年末の試験に備える」



北海道開拓の村に復元保存されている北海道中学校の校舎

のだった。

文芸との出会いも北中時代だった。四年生のときに、級友とともにガリ版刷りの雑誌「クローバー」を創刊した。恐らくは、この体験が編集者としての和田芳恵の原点となったに違いない。中央大学法学部に在学中には同人誌「新古典派」を発行し、新潮社時代には「日本文学大辞典」の編集などに関わった。

■学窓で「たけくらべ」耽読／戦後の文芸復興に挫折

昭和二十二（一九四七）年創刊の「日本小説」には、戦後の文芸復興に寄せる和田の熱い思いが込められた。

所々に穴の開いた仙花紙を使った薄っぺらな雑誌だが、そこには高見順、丹羽文雄、太宰治、林芙美子らの作品が並んだ。

編集後記の中で和田は、次のように記した。

「総ての面で日本は絶望的であるようだ。しかし、私達は日本人以外ではあり得ないのだ。この苦痛と困難を日本民族が克服しなければならぬ。（略）現在の小説をもって満足するものでもない。しかしどんな事でも最後までやって見てからの事だと思う」

「日本小説」は、戦後の文壇史で中間小説誌のはしりと位置付けられ、文化に飢え切った人々が、飛びつくように買い求めた。しかし、経営的には苦しく、二年後には膨大な負債を抱えて倒産、和田は取

り立てを逃れての長い潜行生活に入るほかなかった。

不遇はハレー彗星のように繰り返し訪れたが、光明もまたその不遇の中から生まれてきた。

筑摩書房から持ち込まれた樋口一葉全集の編纂の仕事が、モグラ生活の和田をよみがえらせた。彼は、一葉が二十四歳で夭逝するまでに書きつづった日記を考証する作業を通じて、樋口一葉という作家像と樋口夏子という女性像とを描き出そうとしたのだ。

当時の様子を静子夫人は「寝ても覚めても一葉、一葉といった感じの日々でした」（著書「命の残り」から）と振り返る。そして昭和三十一（一九五六）年刊行の「一葉の日記」（筑摩書房）は、日本芸術院賞に輝いた。

そもそも、和田と一葉の出会い、兄・敏恵が持っていた薄汚れた一冊「たけくらべ」に始まる。北海道中学二年のときだった。

■名作生んだ故郷への慕情／58歳「塵の中」で直木賞

日本小説時代から和田と親交の深い作家・吉田時善は、こう評した。

「樋口一葉という女に注がれる和田の目には、ほとんど、視姦に近い光があった。そういうマニアックなものがあったから、和田は、か細い体で、経済的にも精神的にも追いつめられながら、原稿用紙七百枚にもおよぶ『一葉の日記』を書きおろす力を維持できたのであろう」（新潮社「こおろぎの神話」）

この後、和田は一葉研究の第一人者としての地歩を固めるとともに、「塵の中」（一九六四年直木賞）「接ぎ木の台」（一九七五年読売文学賞）などの作品を世に送り出した。「暗い流れ」に続き「雪女」（川

端康成文学賞）を発表した昭和五十二（一九七七）年没。

東京暮らしが長かった和田は生前、故郷に向けて北海タイムス紙上に次のような一文を残している。「私の考えるふるさととは遠望的であり、また少年時代に親しんだ文学書を通して屈折され、ゆがみながら、巨視的な慕情を抱かせます」



旧制・北海中学には、和田芳恵のような「日陰者」や「敗残者」「落伍者」が数多く集まってきた。世間からは「塵捨て場」と陰口をたたかれた。しかし、教師たちは彼らを、荒地地にも根を下ろす「タンプオ」と呼んだ。やがて、小さな種が風に乗ってどこまでも飛んで行き、太陽に向かって真っ直ぐに花開かせることを信じた――。